



滋賀県たかしま災害支援ボランティアネットワーク「なまず」
太田 直子

1 はじめに

「たかしま災害支援ボランティアネットワーク『なまず』」は阪神・淡路大震災をきっかけに2001年「明日は我が身」との共通認識で集まった地域住民約30人でスタートしました。何から始めていいのかわからず、湯飲み茶わんを見つめる時間が長い集会は苦痛で各会ごとに人が減り、とうとう最後は6人になってしまいました。そこで自然消滅状況を脱するために心機一転、新たなメンバーを加え、まずは自らの力をつけること、地域住民に向け啓発活動をするを目標としました。テーマは『「備えと構え」で減災目指す』。活動の3本柱は、①防災減災啓発活動、②自らの減災力をつける、③被災地支援活動です。

2 出前講座 ～笑って減災 なまず流～の誕生

啓発活動の第一歩は防災情報を書いたチラシをシリーズで全戸配布することでした。数回配布したあたりで確認したところ、ほとんどの人の目にふれていないことが判明しました。そこで次の手段として、取り組んだのが防災漫才と劇です。漫才師や役者といった人材を近所からみだし、自分たちのオリジナル台本で練習と発表を重ねました。その結果、お笑いの好きの関西に合っていたのか大変好評を博しました。さらに防災クイズ、腹話術・歌を加え5つからなる現在のプロ



漫才

グラムの原型が完成しました。反響は上々でした。話す・聞くの一方通行でなく、笑う・答える・手を挙げる・作る・歌う・手拍子をするなどの全員参加型の内容が防災講演会には珍しかったからだと思います。

顔が見える距離での独特の講演会の評判は次第に広がりました。合併前の小さな町でのささやかな取り組みが他府県へと、また対象も高齢者や福祉的な集会などに限られていたものが、自治会や企業、各種団体、保育園から小中高はもちろん大学や養護学校などありとあらゆるこ



減災教育

ろで講演するようになり、現在では年間約60回、通算700回以上開催しています。大変なのは対象に合わせたプログラムや台本、教材を作らねばならないことです。そこは様々な職種のメンバーが知恵を出し合う「楽しくなければ続かない『大人のクラブ活動』」的な「なまず」です。「平成21年度防災まちづくり大賞 総務大臣賞」、同年の「防災功労者内閣総理大臣賞」につながることになりました。

これが ～笑って減災 なまず流～です。



教材作り

3 伝える難しさ

出前講座開始から13年。受講者からはどのプログラムも防災・減災に徹し、内容が濃くしかも大変わかりやすいとお褒めのことばをいただきます。しかしながら2度3度と同じ地域や団体へ出向くことも少なくないため、前回と内容が重複しないように、しかもその地域性や年齢、団体の性格に沿ったプログラムにしなければならないという大変さがあります。また、漫才や腹話術・紙芝居といった手法ゆえに、イベントのアトラクションがわりでステージに立つといったこともありました。地域、団体の防災・減災

に対する意識や防災力に対する大きな温度差が見て取れ、同時に危機感のないところで伝えることの難しさを実感しています。また、講演中には好反応を得ていても、どこまで「備えと構え」の実践につながっているのか、見えないのが不安なところでした。



出前講座

4 減災教育の必要性と緊急性

昨年5月より、子どもの減災教育のプログラムとして「減災 アクションクラブ」をスタートしました。テーマは「命にまっすぐ ほんまもん」、目標はまさかの時を生き抜くために子どもたちの行動力を育てることです。便利で快適な生活環境の中に暮らす子どもたちが、突然の非日常に対応できる力をつけることは大変重要なことです。先の震災の「釜石の奇跡」は素晴らしい指針となりました。

これからの災害の時代を生きる子どもたちに対し、①どこでも寝られる、②なんでも食べられる、③どこでも用が足せる、この3つができる強さを育てることが私たちの取り組みの集大成と考えています。